

大岩千穂ソプラノリサイタル

ピアノ：佐藤正浩

1部

私を泣かせてください……………ヘンデル
すみれ……………スカルラッティ
マリンコニア……………ベッリーニ
別れの歌……………トスティ
愛の小径……………ブーランク
わが母の教え給いし歌……………ドヴォルザーク
くちづけ……………アルディーティ

2部

「ファウスト」より 宝石の歌……………グノー
「ラ・ボエーム」より 私の名はミミ……………ブッチェニ
「つばめ」より ドレッタの夢……………ブッチェニ
「蝶々夫人」より ある晴れた日に……………ブッチェニ
「ルサルカ」より 月に寄せる歌……………ドヴォルザーク
「こうもり」より チャールダッシュ……………J.シュトラウス

冬

2003 四季コンサート 20周年記念

2003年12月11日(木) 6:45PM

会場：浜松市教育文化会館

主催：浜松音楽友の会

プロフィール

大岩千穂 (ソプラノ)

1996年フラヴィアーノ・ラボー国際声楽コンクール第1位をはじめ数々の国際コンクールに上位入賞。25歳でヴェルチェッリでのコンサート形式「椿姫」でイタリアデビュー。1998年オーストリアのサンタ・マルガレーテン・フェスティバルで「カルメン」のミカエラ役で大成功を収め、続いて北欧各地での「椿姫」で好評を博す。1999年ハンガリー国立歌劇場で「ラ・ボエーム」のミミを歌い、特別新人賞を受賞。2000年にはイタリアのアスコリ・ピチェーノ歌劇場での「蝶々夫人」が絶賛され、翌年、ヴェニス・フェニーチェ劇場で同役で出演。2002年7月にはボリショイ劇場管弦楽団とヴェルディのレクイエムを共演。また同年アメリカのバーチ・オペラでも「蝶々夫人」でデビューし、絶賛を博した。その間、1997年藤原歌劇団公演「ラ・ファヴォリータ」のイネス役で日本デビューを飾り2003年2月に名門チェコフィルハーモニー管弦楽団と共演、4月には新国立劇場で「ラ・ボエーム」のミミを歌い、それぞれ大成功を収める。また、今秋10月、ロンドンのコヴェントガーデン・セント・ポール教会でロンドンデビュー・リサイタルを行なった。音楽性、表現力を備えたリリック・ソプラノとして海外で注目され、今後の活躍がさらに期待されている。第10回グローバル東郷子賞受賞。1998年村松賞受賞。1998年度五島記念文化賞オペラ新人賞。ミラノ、ニューヨーク在住。

佐藤正浩 (ピアノ)

東京芸術大学音楽学部声楽科卒業。ジュリアード音楽院ピアノ伴奏科修士課程修了と同時に同音楽院声楽科、及びジュリアード・オペラセンターの専属ピアニストとなる。1992年サンフランシスコ歌劇場のオーディションに合格。1995年指揮者ケント・ナガノの招きにより、リヨン国立歌劇場の第一コレペティートルとなり、多くの指揮者から絶大な信頼を得る。1998年のシーズンからはパリを本拠地とし、シャトレ劇場を中心としてヨーロッパ各地の歌劇場から招聘を受けコレペティートルとして活躍する一方、指揮者としての活動も開始している。

大岩千穂
ソプラノリサイタル



CHIHO OIWA
SOPRANO RECITAL

●ヘンデル／私を泣かせてください 1710年作曲

ヘンデルのロンドンにおけるデビュー作がこの歌劇。物語は十字軍時代の勇敢な騎士リナウドと将軍の娘アルミレーナのラブ・ストーリー。〈私を泣かせてください〉は第2幕第4場、魔法によって幽閉されたアルミレーナが、「過酷な運命に泣こうとも、私をそのままにして」と切々と歌い上げる。この歌劇の中でも特に親しまれている。

●スカラッティ／すみれ 1694年作曲

イタリア古典歌曲として広くピアノ伴奏で歌われているが、もとはスカラッティがナポリで初演した3幕ものの歌劇、「ピロとデメトリオ」の第2幕で歌われるアリア。優美で上品な香りが漂う旋律とリズムで、「露に濡れて薫るすみれたちよ、お前たちは私の野心を咎めているようだ」と歌われ、生き生きとした表情で完成度も高い。

●ベッリーニ／マリコンニア 1829年作曲

《夢遊病の女》、《清教徒》、《ノルマ》等ベルカント・オペラの作曲家として名高いベッリーニの歌曲は30曲ほどが残されているが、いずれも独特の美しいメロディに溢れている。この曲は「6つの室内用アリエッタ」として出版された中の第1曲、「マリコンニア、私の命をあなたに捧げる」というピンデモンデの歌詞がロマンティックに歌われる。

●トスティ／別れの歌

ローマにおいて歌曲を発表していたトスティは、ロンドンに招かれヴィクトリア女王の音楽教師としても活躍し男爵を授けられた。イタリアオペラ全盛の時代に敢えて歌曲にこだわり続けてきた作品は、現在も色褪せることはない。美しい旋律の中にも哀愁を感じさせる〈別れの歌〉は、「発つこと、それはひとつの戯れだ」と歌われる。

●ブーランク／愛の小径 1940年作曲

ブーランクの戯曲《レオカディア》の上演のため作曲された舞台音楽の一部で、ウィーン風ワルツ。詩はジャン・アヌイ、当時シャンソン・ワルツの女王と呼ばれたイヴォンヌ・ブランタンが歌って有名になった。「私がその小径を忘れてしまったとしても、愛よりもっと強い小径の思い出が残ってほしい」と歌われる愛すべき曲で、人気も高い。

●ドヴォルザーク／わが母の教え給いし歌 1880年作曲

一男二女に次々と先立たれたドヴォルザークは、その悲しみの中でチェコ教会音楽の金字塔とも言うべき名作《スターバト・マーテル》を書き上げたが、その後ボヘミアの詩人ヘイドゥークの詩によって、民俗的抒情を謳歌した歌曲集《ジプシーの歌》を創作した。この作品はその第4曲にあたる。静謐にしてドラマティックな極めて美しい作品である。

●アルディーティ／くちづけ

ルイジ・アルディーティはイタリア生まれの歌劇指揮者。世界中で指揮活動を展開したが、作曲家としても歌劇や歌曲を残した。〈くちづけ〉は、この一曲でアルディーティを音楽史に記した代表作である。華やかな技巧を要する曲で、「お前がそばにいてくれるのはなんと楽しいことか。お前の愛以上の喜びを私は望まない」と歌われる。

●グノー／「ファウスト」より 宝石の歌 1859年作曲

ゲーテに題材を求めたグノーの代表作。初演こそ好評を得られなかったが、今では世界中で愛されている。悪魔メフィストフェレスの誘いによって若返ったファウストが、美しいマルガレーテと恋に落ち、第3幕でマルガレーテはファウストを想い、「この宝石を着けるとお姫様のように」と憧れに満ちて〈宝石の歌〉を歌う。

●ブッチーニ／「ラ・ボエム」より 私の名はミミ 1894年作曲

パリを舞台に、芸術家を夢見る青年たちの生活を描いた青春ドラマで、優れた管弦楽と瑞々しい抒情性により、ブッチーニの三大名作に数えられる。第1幕でテノールのアリア〈この冷たい手に〉に対して歌われるヒロイン、ミミの〈わたしの名はミミ〉は、お針子や花作りをする自らを語り、「本名は違うけれど、なぜかミミと呼ばれる」と歌う。

●ブッチーニ／「つばめ」より ドレッタの夢 1917年作曲

フランス第二帝政時代、パリとリヴィエラを舞台にした悲恋物語。第1幕、銀行家ランバルドの愛人であるマクダの豪華なサロンでは、毎日大勢の人が集まって詩人プルニエたちと会話を楽しんでいる。詩人は新作を披露するが未完成。後を受けてマクダが「ああ、私の夢！私の命！最後に幸福がやって来るのなら」と恋を讃美する〈ドレッタの夢〉を歌う。

●ブッチーニ／「蝶々夫人」より ある晴れた日に 1904年作曲

薄幸で純情なヒロインはブッチーニの最も好んだ主人公で、このオペラも殆ど重要なアリアは蝶々さんがソロで重唱で担っている。あまりにも有名なこのアリアは、第2幕第1場でピンカーターの帰宅を待ちながら、「ある晴れた日、海の向こうに一筋の煙が上がり」と歌われる。しかし彼女の悲しい運命が暗示される曲でもある。

●ドヴォルザーク／「ルサルカ」より 月に寄せる歌 1901年作曲

数あるドヴォルザークのオペラで最も著名であるばかりではなく、19世紀オペラの中でも極めてメロディアスな叙情的メルヘンである。いわゆる水の精オンディエスの物語で、美しい人間の王子に恋焦がれたルサルカ（水の精）が第1幕の冒頭で歌うアリア。人間の姿になって王子と一緒にいたいと嘆き、月光に自分の熱い想いを託す。

●J.シュトラウス／「こうもり」より チャールダッシュ 1873年作曲

気品に満ちた風趣、明確な構成観、J.シュトラウスのみならずオペレッタの名曲中の名曲である。その中でも第2幕でアイゼンシュタイン夫人ロザリンデによって歌われるこの〈チャールダッシュ〉は、人々に深く愛されている。始めのラッサンというゆったりした部分、後半の速いフリスカとの対比、ハンガリーの哀愁が濃厚に蘇る。